



針葉樹會報

通卷 第五十二號

H 兄へ

浦松佐美太郎

あなたが提出された「登山とは一體何であるか」と云ふ問題の一文を、大變興味深く讀みました。此の問題は、一橋山岳部だけの問題ではないと思ひます。私自身狭い見聞の範圍ながら、到る所で目にし、耳にして來た所です。殊に最近數年間の日本の登山界に於て、隨分問題となつてゐる點と私は了解してゐます。たゞ残念なことに、問題として重要なものでありながら、眞面目な議論が行はれてゐないことです。その爲めに隨分酷い一方的な偏つた議論も、平氣で行はれてゐます。従つて、當然問題となるべきものが、問題とならずにやり過ごされてゐる感があります。そしてその一面では、夫々の人が夫々の形で問題としてゐるのです。云ひ換へれば、日本登山界の一般の問題とならずに、唯個人の問題として片付けられ、そして夫々の一方的の解釋を與へられたまゝ、打捨てられてゐるのが現状だと思ひます。それが又、やがては日本登山界の何となく雜然とした現状を作り出す基ともなつてゐるのだと考へられます。之が爲めに、日本の登山界は、最も根本的なる問題に關聯のある事に當面する度に、その爲す所を知らずにあつてゐます。

私はあなたの一文を讀む迄、一橋山岳部でかうした問題が、眞面目に取り上げられてゐることを、迂濶にも知らずにゐました。今その一文を讀み終へて、私は、久し振りに嬉しいたよりの手にした時の様な喜びを感じてゐます。私にもその議論に一の貢獻をさして頂き度いものと思ひ、此の一文をあなたの名宛に草する次第です。

私が此處に述べようとする意見は、自分自身の經驗と、その經驗に基いて考へて來た所の範圍のものにしか過ぎません。併し、それは議論の爲めの議論ではありません。自分自身の登山の經驗の間に育て、來たものです。その點であなたの提出された問題に一の解答を成し得る十分の資格があるものと信じてゐます。

順序としてあなたの一文を基として、それに沿ひながら私の思ふ所を述べて行きます。あなたは登山の行き方を二つに分けて考へられてゐます。一は歐洲的な行き方、他は純日本的な行き方と云ふ風に分けられてゐます。そしてその歐洲的な行き方を、A・F・マンメリーの意見を以て代表させ、純日本的なる行き方の内容を漂泊の旅を以て代表させようとしてゐられます。此の二のもの、相會はざる所にあなたはデレンマを感じてゐられる様です。此の分け方に、そして此の二のものを對立させてゐる所に、私は問題の取扱ひ方の大きな過ちがありはしないかと思ひます。二

のものは對立すべきものではありません。まして之を歐洲的なものと純日本的なるものと區別すべきではありません。二のものは對立すべきものではなく、並立すべきものだと思います。

之を説明する爲めには、登山とは何であるかと云ふことを一言しなければなりません。たゞ山に登ることが登山ではありません。勿論讀んで字義の如く登山とは山へ登ることを總稱すと云へば、それはそれ迄です。私達が今日登山と云ふ時の意味は、一のスポーツとしての登山を云つてゐるのでせう。英語で *Mountaineering* と云ふのに當る意味を指してゐるのだと思ひます。

之はたゞ景色を鑑賞する爲めに山へ登ることを云ふのでもなく又瞑想する爲めに山へ登るのを云ふのでもなく、又大勢でピツクニツク氣分で山へ登るのを云ふのでもないと思ひます。今日私達が登山と云ふ時、その意味する所は、山へ登ることの楽しみ、その楽しみを目的とし、之を楽しむ爲めに山へ登ることを云つてゐるのだと思ひます。山へ登ることそれ自身は苦しいことでせう。併しその苦しみの多い程、登り得た後の楽しみは大きい筈です。此の楽しみを登山は唯一の目的としてゐるのだと思ひます。山へ登ることの楽しみ、他に何等の目的をも持たない山へ登ることだけを樂しむこと、こんなことは昔の時代には全然あり得なかつた思想です。ですから、登山と云ふことは、歴史上から云へば、全く近代的のものです。登山史の黎明期が、一七〇〇年代の終りのモン・ブラン登攀に始まるとするのもそれが爲めです。ド・ソウシユウルは、科學研究の爲めにモン・ブランの頂上を極めたのでも

なければ、神を求めに登つたのでもなければ、景色を眺めに登つたのでもありません。たゞモン・ブランへ登ることの楽しみを味はふ爲めに登つたのでした。併し、登山が一のスポーツとして確立して來たのは、一八六〇年代、英國山岳會の創立の頃に始まるのでせう。日本では、明治三十九年日本山岳會創立の時期が、日本登山史上のその時期に當るものと見て差支へありません。日本山岳會はその創立に當つて、登山趣味を普及するのがその目的だと云つてゐます。まことによく云ひ現し得た言葉だと思ひます。彼等は登山を趣味と云ふ言葉で云ひ現してゐます。もつと新しい時代の言葉は之をスポーツと叫んでゐます。何れもその意味する所は、同じ内容のものを指してゐるのだと思ひます。歴史的な解説は之位で止めにして、今度は登山を他のスポーツと比較して考へて見ませう。何を引合ひに出してもかまいませんが、思ひつくな、にスカルを漕ぐことを例にとつて見ませう。スカルを漕ぐことが、スポーツであるのは、川の景色を眺める爲めでもなければ瞑想する爲めでもなければ、競争する爲めでもありません。スカルを漕ぐ楽しみを、その目的としてゐる所にあるのだと思ひます。走高跳にしてもそうです。人を負かすことがその目的ではなく、自分が幾米跳べたと云ふ所に楽しみを求めてゐるのだと思ひます。それが樂しめない人には走高跳をスポーツとして之を行ふ資格がありません。同じ様に登山に就ても云へます。山へ登ることそれ自身を樂しめない人は、登山者たる資格がありません。その人は宗教家として、科學者として、藝術家として山へ登つて

るのか知れませんが、登山者として山へ登つてゐるのではありま
すまい。

かう考へて來れば、登山と云ふものに、歐洲的とか日本的とか
と云ふ様な區別を付けるべきでなく、登山は廣い文明の一の所産
であることが了解されること、思ひます。同様に漂泊の旅も亦、
日本の獨占ではありません。之も廣い文明に屬すべきものであつ
て、何處の世界にもあるものです。歐洲にも勿論あります。たゞ
日本では、登山と云ふことがはつきり理解されないうちに、すつ
かり混亂してしまつた爲めに、何もかにもが一緒に入れられてし
まつて、總てを漠然と *Mountaineering* と呼んでゐた爲めの混亂
があつたのに對し、歐洲ではそれが截然と別れてしまつてゐると
云ふだけの違ひと思ひます。勿論歐洲でも、その混亂の起きた時
代があります。そして隨分議論は闘はされて來てゐます。

あなたが歐洲的なるものを代表させられたマンメリーも、之に
就て意見を述べてゐます。日本でも色々の人に、マンメリーの著
書の内容は紹介されましたが、何時も誤り傳へられてゐることが
多い様に思ひます。マンメリー主義などと云ふのは、大變いけな
いこと、思ひます。マンメリーの著書を讀まれ、ば直ちに了解さ
れること、思ひますが、彼は何も一の主義を作り出してはゐませ
ん。優れた登山家ではありましたが、彼の行き方はその當時の一
般の人の行き方と異つてゐる所は少しもなく、彼の意見も亦、そ
の範圍を出てゐません。

例へばあなたは、マンメリーが、登山者は常により困難な登路

を求め可きであること云つてゐる様に解されてゐますが、之も大
きな誤解です。彼はマッターホルンに初めて登つた時のことに就
てかう書いてゐます。マッターホルンへ一度登つたらもうそれで
澤山なので、二度と登る必要はないと人に聞かされてゐたので、
そのつもりで登つたら、結果はそうでなく、彼はそれ以來病みつ
きになつて幾度も幾度も登ることになつてしまつた。そしてその
度に彼は新しい喜びをあの山から見出してゐること云つてゐます。

又彼は、眞の登山者とは、開拓者の氣持を持つた人である。常
に新しい境地を切り開いてゆく人であるとも云つてゐます。新し
い境地を、自らの登山の上に切り開いてゆけば、同じ山を同じ道
から幾度登つても其度に新なる樂しみがあることを指してゐるの
だと思ひます。

又彼は、一の困難に打ち勝つた場合、更に次の困難に向ひ、そ
して何時も自分の全力を發揮することを心懸くべきであるとも云
つてゐます。之は何も登山に限つたことではありません。如何な
ることでも、一藝一能、道に志す者の心懸くべきことだと思ひま
す。當り前のことを云つてゐるのだと思ひます。一の山でも、登
山者としての自己が發展すれば、必ず今迄に氣の付かなかつた新
なる困難のあることに氣が付いて來ます。ですから、一の山でさ
へ、自分に満足の行く様な登り方が出来る迄、それには何れだけ
の精進が要るのか、その點を彼は指摘してゐるのだと思ひます。
之等の點に就て、マンメリーは日本では隨分誤解されてゐる様
に考へられます。今引用して來た様な言葉は、マンメリーだけで

はありませぬ。眞に優れた登山者の残して行つた書物を見れば、必ず誰れのものにも書かれてあることです。そしてその根底をなす要諦は、登山者だけではなくあらゆるものに就て、その道の達人の言の中に含まれてゐるものだと思います。

登山も見様によれば一の藝です。之に精進することによつて始めて楽しみが増してゆくのです。自ら振り返つて、心ゆく迄の満足を味はつた様な登山が幾つありますか。其處から考へ直して、自分の將來の登山を考へて見るのも大事なことです。舞踏の名人の言として、心ゆく迄の踊を一度踊つて見度いと希つてゐると云ふのを聞いたことがあります。それだと思います。何時も全力を以て打ち込んでゆく、そして其處に新しい境地を開いてゆく。藝は無限の世界のものです。

何處々々の谷を通つて、何處の山へ登つた。之は登山の外形です。その登山が、自分で満足ゆける登山であつたかどうか。之が内面の問題です。登山の一步一步が満足ゆけるものであつたかどうか。それに心付かない人達は、眞に登山を味はふ境地に達することの出来ない人達でせう。踏臺をして二米の横木を跳び越へたさて、走高跳が楽しめるでせうか。

あなたが引用された穂高と秩父の比較問題は、以上のことで答へ得ると思ひます。穂高と秩父は外面の比較です。穂高に登つたさしても、踏臺をした走高跳びでは何にもなりません。秩父に登つたさしても、心ゆく迄の登山であるとするれば、その方が遙に優れた登山に違ひありません。たゞ大事なことは、その登山が

自分の全力をかけたものであると云ふ點です。此處に初めて進歩が作られるのですから。

あなたは又ヒマラヤの登山のことにも言及されてゐます。此の點にも、日本では可成の誤解があるやうに思ひます。ヒマラヤの登山のみが登山の總てであるかの様に考へ、之を主張し、又反對に之を攻撃してゐる人があります。之は共に間違つた考へ方だと思ひます。マンメリー達が手を下すことも出来なかつたナンガパルバットの頂上間近まで遂に登り得るに至つたと云ふことは、登山の大きな進歩です。私達は之を否定することは出来ませぬ。そして此處まで行き着き度いと努力精進することは立派なことであり、その資格のある人達に助力を與ふることも登山の趣味を解する者として當然行ふべきことだと思います。

併し之のみが登山であること云ふことも、之は登山の邪道なりと云ふことも、共に常識で判断して見ても可笑しなことです。名人の指す将棋のみが将棋であつてその他は將棋に非ずと云ふか、否名人の指す将棋は邪道なりと云ふ議論と同じです。へボ将棋も名人の將棋も共に將棋です。唯自分が將棋指しであること云ふ時には、それだけの心構へが要ります。人が山へ登るから自分も登つて見ること云ふ人間さ、自分は登山者であること考へる人間さの違ひは、此の心構へ如何に存するものと思ひます。此の心構へなくして自分は登山者なりと稱すれば、昔噺にある立派な衣服を纏つたつもりで裸で馬に乗つて町を歩いた王様と同じことになります。

今日日本の登山界の悪弊は、此の裸の王様が多いことです。そし

てその上に此の裸の王様が、衣物を着てる人の悪口を云ひ、衣物を着てる人を裸だと思ひ込んでゐることです。繰り返して云ひます。一の藝に入る以上は、それに必要な心構へと精進努力が必要でです。

さもなければ、此の社會に足を入れないうことだと思ひます。問題の分岐點は此處にあると思ひます。此の社會の外に立つと決めれば、それで安心がゆくと思ひます。徒らに自分の行ふことをジャステイファイしやうとする苦勞も要らなくなります。

あなたは一なるべき登山の世界を、日本的なるものと歐洲的なもの、二に分ち、二の世界なるべき登山と旅の世界を一ならしめようと思ひました。そして旅を登山の世界の中に存在せしめようとして一層問題を紛糾させてゐます。之等を今一度解き放して夫々の歸屬すべき世界へ歸させられるのが、何よりも大事なことではないでせうか。

其處から問題を今一度考へ直して下されば、きつと一橋山岳部の行くべき方向も、素直に受け容られるのではないでせうか。

最後にあなたの一文の中には觸れられてゐませんが、登山技術の問題も、相當重要な問題と思ひますので、此處で一言述べさせて頂きます。

登山技術に就て注意しなければならぬ重要な點は、近頃日本に行はれてゐる登山の議論が、やゝこもすること、技術が登山そのものと混同されてゐることです。例へば、登山を哲學することださ獨斷してゐる人達は、哲學することのみが登山であること云はう

とする爲めに他の登山を非難します。多くの場合此の人達の非難の對象としてゐる所は登山ではなく登山の技術です。少し考慮する所があれば直ぐ解ることでありながら、それに心付かない爲めにかうした間違をしてゐるのだと思ひます。例へば岩登りをする人達は、之は肉體的運動をしてゐるのであつて哲學してゐないから、山登りの邪道ださ云ふ様な議論です。之は登山を非難してゐるのではなく、一の技術を非難してゐるのです。技術は技術であつて、それ以外のものではないのですから、技術が哲學しよう筈もないではありませんか。之等は最も甚しい非常識な議論の仕方だと思ひますが、併し之に類した議論は幾らでも行はれてゐます。歐洲的な登山と日本的な登山とを分つことも、此の技術と登山そのものを混同することから幾分影響されてゐる様にも考へられます。確に新しい技術は歐洲から私達は學び取りました。技術は、登山をより楽しくする爲めの手段です。危険を少くし、新しい分野を開拓してゆくのも、技術の發達の爲めです。併し、技術は登山そのものではありません、技術がどんなに上手であつてもそれだけでは登山者としての資格が成り立たないことも、自ら理解されること、思ひます。併し又遂に、少しも技術を磨かずに、登山の眞隨に徹することが出来ること考へるのも随分無茶な考へ方さ云へます。

あなたは登山を廣い世界の問題として、その中に於て考へ度いこと云はれてゐます。全く同感だと思ひます。自分の行つてゐる登山の外形のみを取り出して、それを強ひてジャステイファイし之

を主張しようとする所に、今の日本の山岳界のでたらめさが生じてゐるのです。もつと廣く見直すことが必要なのです。そしてそのことは又、自分自身に就ても云ひ得られます。徒らに外形に拘泥せず、もつと内容に就て、眞剣に考へ直すことが大事なのだと思ひます。

胸のすく様なすつきりした山登り、そんなのを味つて見度いと思ひませんか。之を私からの問題としてあなたに提出します。此の次山へ行かれる機會のある時、若し忘れずにもられたら、此の問題を山で考へて見て下さい。そしてあなたの答を、私は待つてゐませう。

万太郎谷を引返した話

ク マ

昭和十年十一月一日、前夜の夜行上野發で天氣には絶對の自信を持ち乍らコン、AKと三人、今度は少し方面を變へて万太郎谷から耳二つに出で具合よければ國境尾根を縦走して仙ノ倉谷を降りもとの中里驛に歸へらうといふ事になつて出掛けた譯でありました。

處が如何なる天覽のみ入り賜ふたかは知りませんが絶對自信のあつた筈の天氣がまるで當てが外れて水上驛に停つた汽車の窓から外を見るにシト／＼といさも優しく降つてゐるぢやありませんか。ハテナ？ 暫く首を傾げて考へてゐたがふと眼を斜め前にやつた端、之だ!! と今更乍ら己が不覺を悟つた譯でありました。

何だと思ひます。曰く東京中央放送局契約課長の卵たるAK氏の吾不關焉のすました顔を見たからなんです。+が二つで-が一つだから普通ならプラスで納まり相なものですが餘程悪性のもので見えて遂に雨となつた譯なんでありませう。

それでも清水のトンネルを出て中里に下車する頃には雨もどうやらあがり相に思はれて來ました。小生の持つて居る切符の事で中里驛の驛長と少し許りいがみ合ひをやつた後、三人は大きなリュックをやら肩にして暗い道を電燈に導かれてトポ／＼と歩き出しました。右側に道路のチャンと附いてゐる汽車の鐵橋を渡つて左手に土手を降り之から殆ど一直線の道を南へ辿りました、夜も全く明けましたがさつぱりカラリとして呉れませぬ。茂倉谷の炭焼竈へ土樽村の人々が三々五々急いで行きます。毛度澤の假橋を渡りやがて蓬澤につきました。過日の大洪水にあの鐵橋の橋げたが落されて一町も下の河原にころがつてゐた。恐るべきは水の方です。此處で朝飯をさつていよ／＼蓬澤の右岸の道を袈裟丸の原指して歩く事になりました。トンネルの前で線路を横斷し暫く行くに白い棒杭に右万太郎谷へと書いてあります。私達は炭焼に行く土樽の人に豫め聞いて置いた通り之はそのまゝ、見過してドン／＼蓬峠への道を辿りました。又家があつて道が一つ右手に分れます。之も素通りです。ぐつと曲つて万太郎谷を正面に見向二三町行くに右茂倉谷を経て茂倉岳へ四時間とある棒杭があります。此處で蓬峠道と始めて分れるのです。一寸降ると洵に風流な橋があります。此の下の處で蓬澤は一寸した瀧となつて立派

な淵に落ち込んでゐます。前方にはトンネルの換氣塔が一本ポツンと立つてゐます。之が袈裟淵といふものでせう。之を渡ると廣い原があります。之が袈裟丸の臺とか原とか云はれるものです。此の邊で茂倉谷への道と分れ万太郎谷へ這入るやうになつてゐます。炭焼の中繼小屋の様なものが一軒、そして暫く登つて行くと万太郎谷を見おろす崖の上に又一軒、此處には大きな竈があつて人のよささうなお爺さんが一生懸命薪を割つてゐました。私達は谷の様子も聞き度いので暫く立休みをする事にしました。

「お爺さん天氣はごうだらうか」

「さうさな、今まですつと悪かつたでもう良くなつてもいい、時分だが、里の方があんな明るくなつたで今日當りから霽れるかも知んねえな、おめえさん方何處へ行くだね、」

「万太郎谷から谷川の方へ行く積りだが」

「さうか、氣をつけて行きなせえよ、ごうせ一晩ねなきやならねえで、さうだ、あの二の瀧の上に丁度い、泊場があるで薪さへ集めりや水に不自由はねえ、尾根を登つて了ふと雪にでもなりや大變だで其處へ泊りなせえ、天氣が悪くなつたと思つたら思ひきつて歸つて來なよ、無理が山ちや一番禁物だでな、それから道の事だがこの道を行くと自然に谷へ降りるやうになつてゐる、それから暫く五六町も谷を登ると大きな松の木が二本ある、其處をめぐけて藪の中つゝきると道があるでそいつを行くだ、別に大して悪いともねえが天氣が悪くなつたらけえつて來るがいで……」

「ごうも有難う、それちや行つて來ますよ、さよなら」

と私達はお爺さんの好意ある忠告に感謝して其處を出かけました。道しるべのある所から急に谷に下り河原を二三度徒渉して五六町も行つた所で例の松を見出しました。之は左手に一本、右手（左岸）に太いのが二本ある所です。成程一寸藪を潜ると道があります。之から下手は誰も通らぬと見えて雜草がのび放たになつてゐますが上手はごうやら最近も踏んであるやうです。教へられた通り此の道を辿る事にしました。荷が重いので一向渉りませんが大きな澤を三つ許り横切りました。イドゴヤ澤だと思ひますが道の横切る少し上の所が小さな瀧となつてゐて、その遙か上方に大シヨージの頭の北斜面がそぎ落した様に高くかゝつてゐました。あの岩壁ちや一寸手が出せさうもありませんね。一體に万太郎谷は左岸が逆層で右岸が順層になつてゐるやうです。茂倉岳西尾根の紅葉は實に素晴らしいものでした。もう少し早く來たら尙いゝでせう。新緑の頃の訪れも亦格別だらうと思ひます。魚止の瀧さかいふのが下に見えてゐます。疊を敷いた様な大きな岩盤の中央から稍々右岸寄りに節理の關係もあるのでせうが丁度凹型の様になつて谷の水が落ちてゐるんです。瀧はよちれて右へ曲つてゐます。まあ見事なものと思つて差支へないでせう。徑は大栗澤を過ぎ地形圖にもあらはされてゐるやうに谷が將に廊下状にならうとする手前の小澤の出口で終つてゐました。此處から二三度徒渉すると二三町にして正面に小さな瀧が現はれます。此處で谷通しには絶対に通れぬらしいので高廻りを考へなければなりません

そして左手を見るに階段状に落ちて来る小澤がある。之から何さか左手の藪を潜つて瀧の上を通れる可能性が見えたので一寸登つて見ました。オタキノ澤さいふのが之であるうと思ひます。案にたがはず直ぐ右手に踏んだらしい跡がある。灌木の頭に鉈が入れてある。占めた、さ許りに之に従つて行きます。不完全ながら山男にとつては必要にして充分な踏跡であります。此の踏跡は茂倉岳の南微西一六〇〇米突のオコマガ岳の真南對岸に小澤が瀧となつて落ちるその少し下手で終つてゐます。此處は丁度二の瀧の上になるのかも知れませんが。之の一の瀧の間にはいくつも瀧があるのではないかと思はれます。私達が此處へ着いたのは正午でしたが尾根上を見上げると新雪が大部やつて來てゐるやうだし天氣も相變らず面白くないので早過ぎると思ひましたが第一夜を此處で明かす事に決めました。瀧の上の一つのテラスがあり、その上に少々傾斜した第二のテラスがあります。此處からすつとオコマガ岳への斜面となつてゐる譯であります。ビヅアクした人があつたと見えて四五人られる此の岩上の隅にさゝやかな炊事場の形跡がありました。此の岩上の端を二三間へつると瀧の上の河原に下りる事が出来、水をさるに便ですが日が暮れてからは足許が危なくて一寸嫌な所です。踏み外すと瀧の中へ丁度捲き込まれる事になつてゐるからです。近ちやんは小生とAKに後事を托し單身上流の偵察に右岸をへつゝ消えました。その報告による谷一杯の釜が直ぐ上に控えてゐてその傍のへつりは重荷ちや一寸無理かも知れぬと首を傾しげてゐました。薪集めには全く閉口しました。

流水が殆どないのです。それに濡れたもの許りで流石の焚火係の小生も弱りました。然しメタと唯一の怪しげな扇で兎に角赤々と炎をあげるまでにこぎつけ、ごうやら年來の面目を保持する事が出来ました。

一わたり用事が済んでさて腰を落着けて考へると正午から明日の午前六時まで十八時間を此の岩上に過さなければならぬ事がわかりました。十八時間だれ、殆ど一日ぢやないか、いさゝかてれましたね、一番心配したのは火の絶える事でした。此の方はごうやら保たす事が出来ました。然し時々雨がやつて來るのは心細かつたです。三時頃から日の暮れるまで仕様事なしに四邊の景色を仔細に打眺めました。遙か上空にあたつて耳二つの斜面が新雪に薄化粧した姿が見えます。第三の瀧さかいふのは見えません。右手に地圖にない小澤から高さにして三丈位の小便瀧が落ちてゐます。同じ側の少し下手、私達の眼の前の小澤、之は前に一寸觸れたものです。矢張り小さな瀧となつてゐます。正面の壁はオジガ澤の頭へ續くものです、よく見ると全部逆層となつてゐます。こんな所は指先の曲つた(誤解しちやいけませんよ)スケ坊に委せて置きませう。直ぐ下の瀧の落口をちつと見てゐると後から後から押し來る水の爲めに波紋が出來てそれがすうつと瀧になつて行く、その影がまるで魚の様に見えてはじめはハテナと思つた位でした。そろ／＼四邊は夕闇となつて來ました。之から十二時間か、ウヘツ長げえなあ、さ又感心した事でした。もう何も見えなくなりました。焚火の向側でコンちやんが濡れた枯草に片ひぢ立

て、ウイントヤツケをきたま、横になつてゐます。AK氏は嬉し相な淋しさうな顔をして遠くの方から焚火に敬意を表してゐます。小生は例のものぐさから着のみ着の儘でペラ／＼なスリーピングバッグを雨よけにかぶつて一生懸命火の用心です。消えたら最後もう再び起す自信はなし、さりさて燃やし過ぎれば朝まで保ちつこないし、此の所實に苦辛慘憺たるものでした。時に星が見える時もあるんです。かと思ふとつと霧が夜眼にもしる／＼かゝつて来てサア／＼／＼と雨がかゝるんです。八時頃兎に角一度ぬる事にして懷中電燈を頼りに着替へをつけて毛布の中へ潜り込みました。冷え込んだせいかお臍の邊りがシクリ／＼と痛み出しました。AK氏に白金カイロを借りてあてがつて置いたらどうやら納まつて来ました。その中に中央にれたAK氏からブル／＼／＼と高周波が發振されて来ました。コンちゃんも小生も之に同調してブル／＼とやりました。そろ／＼夜が更けて来たのです。袋の中へもぐつてゐてあのバラ／＼といふ雨の音を聞くのは何とも言へぬ憂鬱なものです。あゝ屋根さへあつたらなあと思ひましたね。ザアアと來ます。嫌な野郎だ、雨だけは勘辨して呉れよと心の内に願つた處で之は天には通じなかつたさ見え時々意地悪くやつて來るんです。十一時頃だつたかコンちゃんがまづ起きて了ひAK氏も立上りました。クマさん焚火頼むよ。で小生も遂に起されて了ひオキを利用してどうやら火を起す事が出来ました。勿論何もする事はなし唯焚火を見つめてゐる許りです。バットを無暗に吹かして大凡二時間許りを旨い具合に過しました。又ぞろ毛布に潜り

込んだんですがそれがもうすつかり雨が徹つて了つてゐて、こんな中へ這入るのかなと思ふと實際情なくなりましたね。

三時半頃でしたか今度は斷然起きて了ふ事にしました。焚火を起すのも最後です。満身の技術を發揮して濡れた灰の下から三分四方位なオキを見つけ出し之をもと手に最後の焚火をのぼらせる事が出来ました。恁んな事をやつてゐる内にどうやら四邊が灰色になりやがて明るくなつて來、正に十八時間の坐禪もがんばり通して六時となりました。實際こゝいふ事をやる人間といふものは辛棒強くなるものですよ。濡れた靴下を再びはいて荷拵へも終りました、此のグシヨ／＼の身體で尾根に出て万一吹雪にでもあつたら最後だと思ひ惜しいとは考へたが此處から再び元來た徑を引返す事になりました。それに水でも増へたら徒渉が絶対に出來なくなりませんからこの事も考慮した譯です。

踏跡から廊下に降り徒渉をして山徑に入り松の木から谷、そして昨日最初に別れた炭焼のお爺さんの所へ寄つたらお爺さんは里へ下りその代りの人が薪をきつてゐました。

「おめえさん方は昨日登つた人けえ、さうけえ、よく下つて來たのー、爺さんがとても心配してたが、こんな悪い天氣ちや谷へへえつてさぞ難儀してるだろう、無理しねえで歸つて呉れるさえ、が、さそれ許り言つて里へ下りたゞ、ほんさによく下つて來た、山ちや無理が一番悪いでなあ」

「どうも色々御心配下さつて有難う御座いました、お爺さんに無事に下りて來たからさ呉々も宜敷言つて下さいよ」

さ挨拶をして私達は青い空が時々見えるが谷の奥にはまだ嫌な雲が分厚にかゝつてゐるのを唯一の慰めとして袈裟丸の原を指して下つて行きました。(一〇、一二、六)

記念寫眞に増山君不在

クマ

(アイセンは小屋に置くものなり)

去る十一月の連休を利用して新雪の白馬へ行つた事は皆さん先刻御承知の事。ボン、木さいふ名うての雨男が行かなかつた爲めか登頂の日だけ俄然素晴らしい天気になり、白馬が生れてはじめての小生にとつては實に幸運の山行でありました。

暗い裡に猿倉の小屋を出て馬尻の少し手前でオットメを濟ませ勢ぞろいをして昨日スキーを滑らせた所へ来た頃に漸く東天が白みが、つて皆の顔も解る様になりました。

寒さの爲めに雪はすつかり凍りついてゐます。シールをつけて登ろうか、それともアイセンにしやうか、と暫く相談してゐました。結局スキーはかついで登る事になりました。

然るに茲に唯一人斷然シールをつけたまゝ、白馬山頂まで我張るうさいふ勇者が現はれたんです。之が誰だつたかわかりませんが、増山清太郎君その人ですよ。さいふさ皆さんは「ハ、ア増山君は例のコリ性で堅雪に對するシールのき、具合でも數學的に取扱つて見る積りだつたんだらう」なんてお考へになるでせう、その通りなんです。少くなくとも増山君にして見たらさう考へざるを得

なかつたんでせう。けれども凡夫のあさましきには私達には彼氏の事もなげな悲痛な顔を見てはあながちさう簡單には片付けられぬものがあつた様です。

早く云へば彼氏は東京から汽車にのせ自動車にのせてわざ／＼猿倉の小屋まで御愛用のアイセンを運んで来たゞけださいふ事になるんです。

彼氏にして見れば「有り得べからざる千慮の一失」さでもないふのでせう。兎に角彼氏があの大雪溪でアイセンを使はなかつたさいふ事は吾々にして見れば大したもうけものをしたと喜んだ次第なんです。恁んな事をいふと増山君は又ムキになつて「乗客さはこの客也」なんて云ひ出すかも知れませんがこんな時には此のアイセン問題を引張り出して彼氏をギャフンとやらかす事が出来るんだから今度の白馬行は實に思ひがけぬ收穫をした事になるでせう。彼氏は一番上のクレヴァスから引返しましたが私達は又逆に大して惻口な方でもなかつたんですよ、何しろスキーを山頂附近まで擔ぎ上げコンちゃんなんかは結局一度も滑らずに又擔ぎおろして来たんですから何の爲めに重い思ひをしてスキーを持つて行つたか今考へてもよくわからない位です。小谷部のさつた村營の記念寫眞に増山君が居なかつたさいふのは實はこんな譯だつたんです。(一一、一、一〇)

後記 餘白の都合上、會員の消息記録等は近日發刊の五十三號にゆづりますから左様御承知下さい。

第一頁の新カットは雲チヤンの作。別に孫サンがモデルと云ふ譯ではないさうです。